

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00087

研究課題名(和文) アジア・太平洋戦争 カトリック教会における「動員」

研究課題名(英文) "Spiritual Mobilization" in the Catholic Church during The Asia-Pacific War

研究代表者

三好 千春 (Miyoshi, Chiharu)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：30241912

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本カトリック教会が日中戦争開始時に戦争協力の姿勢を明確に示した背景として、まず、19世紀後半にフランス等で登場した戦争に霊的な益があるとする「戦争の神学」の影響があったことを明らかにした。また、日本政府が満州事変以降、「防共」をキーワードとしたプロパガンダ、外交政策を展開したことにより、当時、軍部や日本社会から攻撃されていた日本の教会は、反共産主義を掲げているカトリック教会が日本政府に協力し認められる機会であるとみなし、日本の中国侵略を「防共」の活動として支持した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀前半の日本カトリック教会の戦争協力の実態に関する先行研究が殆ど無い中で、教会の戦争観や日中戦争観を明らかにし得た学術的意義は大きい。また、日本カトリック教会の戦争観や日中戦争に対する協力活動を、世界的なカトリック教会の動向の中で位置づけ、一国史観の枠を超え得た点にも重要な意義があると思う。そして、新たな戦前などと言われる現代において、教会がどのように国家の戦争の論理に同調し、自ら従って行ったかという「内なる動員」の一端を明らかにしたことに、社会的意義があると信じる。

研究成果の概要(英文)：This study is a theological analysis of various specific war-related discourses of church leaders (bishops, priests, theologians, and Catholic discourses) in the Catholic Church in Japan, and examines the dynamics and mechanisms of spiritual mobilization at work within the Catholic Church in Japan. This study changed its plan midway through, to a study specifically surrounding discourses on the Second Sino-Japanese War. First, I clarified that the Japanese Catholic Church was strongly influenced by the "theology of war" that emerged in France and other countries in the 19th century, a view of war that affirmed war as a "blessing" such as war bringing about a revival of faith. Next, I clarified that the Japanese Catholic Church uses the Church's "just war theory" to argue that this war is a war of self-defense for Japan, as well as a just war because of its "anti-communism" to prevent the spread of communism in East Asia.

研究分野：日本カトリック教会史

キーワード：日本カトリック教会 戦争観 日中戦争 反共産主義

1. 研究開始当初の背景

近代日本カトリック教会と日本の戦争に関する先行研究は極めて乏しく、満州事変からアジア・太平洋戦争期に関しても、神社参拝問題をめぐる動向などに研究が集中して、それ以外は本研究代表者による、宗教団体法がカトリック教会に及ぼした影響に関する基礎的研究や、フィリピンやインドネシアに派遣された「宗教宣撫班」関係以外の研究などしかない状態であった。日本のプロテスタント諸教派と戦争に関する研究はある程度蓄積されているが、カトリック教会に関しては殆どないというこの不均衡は、キリスト教会が全体として日本の戦争に対しどのように関わったかという実態の把握を困難にし、キリスト教の戦争責任の考察の深化を妨げてきた。また、仏教や神道をも含んだ宗教が戦争とどのように関わったのかというテーマを宗教横断的に考察し、その共通点、相違点、異質な点はどこかを追求することも難しくしている状況であった。

2. 研究の目的

上記の研究状況を鑑み、本研究は当時の日本カトリック教会指導者たちやカトリック系メディアに現れる戦争をめぐる言説を包括的に分析し、その特徴を明らかにすることで、教会においてどのような神学的な論理で信者に対する精神的動員が行われたのか、を明らかにしようとした。特に、具体的には以下の2点を中心に考察を行うことを目的としていた。

当時の日本のカトリック教会の戦争そのものに対する認識はどのようなものであったか。その内容の把握および神学的背景、また、そのような戦争観を持つ要因について明らかにすること。

当時の日本の教会の反共産主義言説の具体的な内容を把握し、その特徴を明らかにするとともに、教会の反共産主義が日本の戦争への協力にどのように作用し、影響を及ぼしたかを、その神学的な側面を含めて考察すること。

3. 研究の方法

先述したように先行研究が殆ど無いテーマであるため、基本的に本研究は、一次史料・文献の収集と調査検討を中心とした。主たる史料はカトリック系雑誌、新聞、小冊子、および、バチカンが刊行した所蔵書を主題別にまとめた史料集などである。なお、パリ外国宣教会および布教聖省（現・福音宣教省）のアーカイブでの史料調査も予定していたが、コロナ禍により、最終的には実行できなかった。そして、それらの史料・文献の読解を通して進めた研究の成果を、学会誌や国内の学会を通じて発表した。

4. 研究成果

研究目的の については、1930年代の日本カトリック教会における指導者の一人であったシャンボン東京大司教の日中戦争言説を通して、日本のカトリック教会の戦争観には第一世界大戦の影響があることに気が付いた。そこで、日本の教会の戦争観理解の前提として、日本カトリック教会の第一次世界大戦観を考察した。その結果、大戦当時のフランスで影響力のあった「戦争の神学」と呼ばれる、戦争は信仰の復活などの恵みを教会にもたらす神の摂理の業、神の愛の発現であるという戦争観の影響によって、日本の教会は、戦争は悲惨であるが、それを上回る「福利」があるという戦争観を持っていたことを突き止めた。この戦争観は、アメリカ・イギリスなど連合国軍との戦争に突入した1940年代初めにおいても、まだ教会の戦争関連言説中に見られるもので、教会の戦争協力を考える上で、見逃せない。これは、従来、指摘されてこなかった点である。これについては、2018年の日本カトリック神学会学術大会にて発表し、2019年に『日本カトリック神学会誌』第30号に論文として掲載されている。

に関しては、まず、1930年代の反共産主義言説について分析・考察を行い、2019年の日本カトリック神学会学術大会で研究発表を行った。ただし、その後、それ以前の反共産主義言説や日本社会における社会主義思想の受容の歴史を踏まえた上でなければ、真に教会の反共産主義言説の内容を理解することができないことに気づいた。このように史料の読み込みと関連文献の読解が不十分であったために、日本カトリック教会の反共産主義の内容とその変遷について十分に把握するには至らなかった。そこで、これについては、次の科研費(課題番号 21K00073)において、継続して扱うべきテーマの一つとし、研究を継続している。

他方、反共産主義言説を考察する中でより強い課題として浮かび上がってきたのが日中戦争であった。日本のカトリック教会は日中戦争がはじまった時、これを「防共の聖戦」と呼んでおり、共産主義との関連で理解していることが伺えた。そこで、日中戦争開始時期の戦争関連言説を取り上げ、そこにどのような特徴があるのかを分析した。その結果、日本カトリック教会が日中戦争を擁護する論理として、伝統的な「正戦論」を利用していることが明らかとなった。そして、その論理展開を細かく分析することで、教会が外部からの圧力により心ならずも戦争協力をしたとばかりは言えず、当時の教会が抱いていた自身の論理に従って内発的に協力している部分があったことを指摘し得た。これについては、2020年に『社会と倫理』第35号に論文として発表している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 三好千春	4. 巻 35
2. 論文標題 日中戦争と正戦論 『日本カトリック信徒の支那事變觀』を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会と倫理	6. 最初と最後の頁 169-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三好千春	4. 巻 36
2. 論文標題 日本カトリック教会の歴史認識 記憶の連帯を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学と神学（韓国・西江大学）	6. 最初と最後の頁 81-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.16936/theoph..36.202005.81	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 三好千春	4. 巻 31
2. 論文標題 日本カトリック教会の第一次世界大戦觀 その原因と意義を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本カトリック神学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 三好千春	4. 巻 2019年4月号
2. 論文標題 カトリック教会と「忠君愛国」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福音宣教	6. 最初と最後の頁 62 - 67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 三好千春
2. 発表標題 「防共」としての日中戦争 日本カトリック教会と日本政府の反共産主義
3. 学会等名 キリスト教史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三好千春
2. 発表標題 日本カトリック教会における反共産主義言説 - 1920～30年代を中心に
3. 学会等名 日本カトリック神学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三好千春
2. 発表標題 カトリック教会と神社参拝問題 - 『エクス・イルラ・ディエ』対『マクシムム・イルド』
3. 学会等名 上智大学神学部創設60周年記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三好千春
2. 発表標題 記憶の連帯を目指して 日韓カトリック教会の100年
3. 学会等名 西江大学CGSI主催学術シンポジウム「東アジア 記憶の連帯と平和；韓日カトリック教会の和解と協力」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 三好千春
2. 発表標題 日本カトリック教会の戦争観 1910～20年代を中心にー
3. 学会等名 日本カトリック神学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 富坂キリスト教センター	4. 発行年 2021年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 190
3. 書名 100年前のパンデミック	

1. 著者名 三好千春	4. 発行年 2021年
2. 出版社 オリエンス宗教研究所	5. 総ページ数 256
3. 書名 時の階段を下りながら 近現代日本カトリック教会史序説	

1. 著者名 高山 貞美、原 敬子編著（三好千春 「カトリック教会と神社参拝問題 『エクス・イラ・ディエ』 対『マクシムム・イルド』」 109～134頁。）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本キリスト教団出版局	5. 総ページ数 232
3. 書名 正義と平和の口づけ 日本カトリック神学の過去・現在・未来 上智大学神学部創設60周年記念講演会講演集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------